

令和7年度 自ら学び 自ら考え 自ら行動する子を育てる



松林小だより

5月

令和7年5月1日

第2号

茅ヶ崎市立松林小学校 校長 下反 達二

温もり

1年生の給食がはじまり、学校はますます活気づいてきました。桜はすっかり散ってしまいましたが、春の陽気と緑かおる風が、気持ち良い今日この頃です。

朝、正門で挨拶をするのが、とても楽しくなってきました。子どもたちが元気よく登校する姿を見ると、今日も一日が始まるという喜びがこみ上げてきます。「おはよう」の声掛けに、元気よく挨拶をする子、照れながら微笑む子、走りながら手を振る子、その一つ一つが大切な瞬間であり、学校が生き生きと息づいていることを実感できる時間です。保護者の皆様が子どもと別れた後、校舎に入るまで、ずっと見守ってくださる姿を見ると、愛されているなあとしみじみとした気持ちにもなります。

数年前、ある方の講演会でこんな話を聞いたことがあります。人が人格を形づくっていく上で、家族から無条件に愛されたり、大切にされたりする「被受容体験」は、情緒面の土台づくりとなるそうです。これが人との基本的な信頼関係の基盤となるともいわれていました。泣いたり、「バーバー、マンマン、ブーブー」等の喃語(なんご)を発したりする乳児に対して、養育者は、その目を見つめながら、その言葉にならない言葉を解釈し意味づけて、乳児の欲求を探し、満たしていきます。これらの原初的なコミュニケーションの過程は、「わたしは人として無条件に受け入れられている」と実感できる体験で…、こういうことっておそらく「愛情」ということになると思うのです。その方に聞いたところ、いわく、『「愛＝温かさ＋厳しさ」だよ。例えば、いつも子どもと一緒にいる保護者だけど、子どもが真剣に訴えているときにスマホを見ながら返事している、これは厳しさではなく、冷たさだよ。例えば、子どもの言い分だけを聞いて他の子を悪者になっている、これは温かさではなく、甘さだよ。今は「温かさ」を「甘さ」と履き違えている「厳しさ」と「冷たさ」が混在している。だから子どもに愛をたっぷり注いでいるようで、子どもは愛を何も受け取っていないこともある。』そんなこともおっしゃってありました。自分にも思い当たる節があり、気を付けようと思ったものでした。

右は、「ごんぎつね」や「手袋を買いに」の作者、新見南吉の「天国」という詩です。南吉は4歳で母親を亡くしておりますが、体のどこかに、「やさしい背中ゆれた記憶」が残っていて、大人になってからこのような詩を書くことができたのではないのでしょうか。お母さんの背中は、ある子にとってはお父さんの大きな手であり、おばあちゃんの腕の中であり、おじいちゃん笑顔であるかもしれません。松林小の子どもたちが、こういったかけがえのない大人の温もりをいっぱい受けて成長していけるよう見守りたいものです。

天国

新見南吉

おかあさんたちは
みんな一つの、天国をもっています。
どのおかあさんも
どのおかあさんももっています。
それはやさしい背中です。
どのおかあさんの背中でも
赤ちゃんが眠ったことがありました。
背中はあっちこっちにゆれました。
子どもたちは
おかあさんの背中は
ほんとうの天国だとおもっていました。
おかあさんたちは
みんな一つの、天国を持っています。

授業参観・懇談会にご参加くださりありがとうございました。

保護者の皆様には、お忙しい中、授業参観・懇談会に多数ご参加くださり、ありがとうございました。皆様におかれましては、保護者様同士で交流を深めていただくとともに、担任、我々職員とのチームワークを深めていただき、わが子だけでなく、わが子に加えて、松林小全ての子どもたちの成長のために、ぜひ力を貸していただきたいと強く願っております。

地域の皆様も引き続き、どうぞよろしく願いいたします。